

明珠

龍泉院
參禅会会報

従容録に学ぶ（四七）

第三二則 巖頭拝喝

〔示衆〕

衆に示して云く、人は語を將つて探り、水は杖を將つて探る。撥草瞻風は尋常に用うる底なり。忽然、箇の焦尾の大虫が跳出さば、又、作麼生？

〔本則〕

挙ぐ、巖頭、徳山に到るや、門に跨つて便ち問う、「是れ凡なるや、是れ聖なるや？」（この賊よ。）山、便ち喝す。（髑髏を裂破り。）頭、礼拝す。（未だ好心には当らじ。）洞山、聞いて云く、「若是、豁公にあらざれば、大だ承い難からん。」（幣を厚うし、言を甘にす。）頭云く、「洞山老漢は好悪を識らず。（却つて又、著忙く。）我れ当時、一手では擡げ、一手では捺えり。」（我れ豈に知らざらんや？）



この変った則の題名「巖頭拝喝」とは、徳山和尚が一喝をくだしたら巖頭和尚が礼拝した、という意味です。公案の題名はおもしろく、また巧みに名づけるのですね。さて、喝よりも棒打することでお名だった徳山の弟子には、雪峰義存と巖頭全叟というずばぬけた二人の英傑がいました。雪峰はいままでもなく、雲門宗と法眼宗を生み出す宗祖として、あまりにも有名であります。これに対して巖頭のほうは、そんなハデな地位にはないものの、人物的には超一流。その証拠に、この『従容録』では巖頭が中心となっている則が、この第三二則のほかに四三・五〇・五五・七五、の各則があります。これらのうち、巖頭が師の徳山と同僚の雪峰をやりこめた第五五則については、すでに本書の三二号でご紹介済みです。

巖頭全叟（八二九〜八八七）は、泉州（福建省）の人。徳山宣鑑の法嗣となり、後に湖北省武昌巖頭山の寺に住して禅風を振います。ところが、六〇歳のときに賊によって斬られて果てたという悲劇の主でもあります。でも、巖頭が述べた「悟りの心境が師と等しければ師の半徳を減じ、師の域を超えてはじめて師の法を伝えるに足る」という厳しい言葉は、不滅の名言として禅門では語り継がれています。スゴイ人だったんですね。

さて、万松さんの「示衆」を要約します。

「人は言葉によって、水は杖でもって、それぞれの量を探るが、学生を指導するには日ごろの強硬手段を用いる。だが、もし一匹の手負いの猛虎がとび出してきたら、いったいどうするかね？」

といった非常時のトッサの対応を聞くもの。語句では、「撥草瞻風」とはもともと深山幽谷に分け入って道人を尋ねる意味ですが、ここでは払・拳・棒・喝などの硬手段。「焦尾の大虫」は、虎が人間に化身するとき尾を焼き切る、という古典の語。ここではいうまでもなく、巖頭を指していますね。

次に「本則」です。

「巖頭が徳山の道場に来て門に跨がり、凡人か聖人かを問うたのに対して、徳山は一喝をくだしたら、巖頭が礼拝した。これを聞いた洞山が巖頭でなくては、あの一喝を認めなかっただろう」と云った。これを聞いた巖頭は「洞山さんは心のとらわれのない人だなア、わしは半ばは認め、半ばは認めなかったのに」と云った。」

こんなところでしょう。禪門のおエラ方はなんとまあ奇矯なふるまいをすることよ、と思わせる典型ですね。でも、そんな話しがこ

うして公案となって残されている事実は、そこに深い禅旨がこめられているからなのです。まず、巖頭が荒道場として知られる徳山にやって来るや、門に登って跨いで「ワシが凡人か聖人か云ってみーい！」には、万松のコメント「スゴイ力量だ」そのもの。それを見た徳山は「ワーツ」と大声をあげた。「喝」は大声を出すことで、「カーツ」と叫ぶことではありません。徳山の大声は、凡とか聖などという分別をフツ切れ、という叫びでした。



巖頭が修行した徳山附近の柳葉湖

そこで礼拝した巖頭の態度を、のちに洞山がほめた。それをまた聞いた巖頭が、その時のおのれの心境について語った、というお話。禅哲三者による三様のすばらしさですが、ここでは洞山はさておき、禅機を中心は徳山の喝と巖頭の礼拝であり、問題は巖頭が徳山の喝を半分しか認めなかったということ。その意味はややむつかしいのですが、つまり分別をなくして天地自然のいぶきと一枚になるのが禅の修行ではあるけれど、ただそうした無事の境地に収まりかえただけではだめで、そうした悟りを日常生活の上に活用されなければ、という不満だったのでしょう。『無門関』第一三則「徳山托鉢」でも、巖頭は師の徳山に遠慮ない批判をしています。これも同じ姿勢に立つものです。

ひるがえって、私なども法要の際に下手な「喝」一声を用いることがあります。葬儀の際には、物故者が受戒をしまつしぐらに仏国土に赴くように、迷わぬようにとの意味でなされるのですが、ただ単に分別をなくしてもらう引導ではなく、それが日常生活の中に生かされるべき禅機でなくてはならないと思うにつけ、おのれの至らなさに恥じ入るばかりです。まだまだ坐りがなっていないのです。

『普勸坐禅儀』をじっくり

味わった一夜接心

六月五・六日

六月五・六日で一夜接心が行われ、二日間で一
九名の方が参加しました。月例参禅会では
一炷が三〇分ですが、一夜接心では四〇分と



一夜接心参加者一同

なり、僅か一〇分の違いですが、この一〇分
間が長く感じられます。第一炷目の坐禅が終
って、三時四〇分から禅講に移り、道元禅師
の『普勸坐禅儀』についてご提唱をいただき
ました。

最初に道元禅師が書かれた『普勸坐禅儀撰
述由来』についてのご紹介がありました。道
元禅師は『普勸坐禅儀』を何度か書き直され
ており、最初に『普勸坐禅儀』を書かれたの
は、禅師が宋から帰国した直後の嘉祿三年（一
一二七）で、まだ博多に滞在されておられた
時期だそうです。その時『普勸坐禅儀』を撰
述することになった事情を、白地銀泥梅花模
様の中国の料紙に書かれたものが『普勸坐禅
儀撰述由来』で、国宝の付となっています。

『普勸坐禅儀撰述由来』によれば、帰国早々
の道元禅師に、宋で体得した坐禅儀を示して
欲しいとの強い要請により、『普勸坐禅儀』
を撰述することにしたと書かれています。また、
長蘆宗頤の『禅苑清規』に示された坐禅儀に
は、宗頤禅師が独自に書き加えたところや、
明確でないところがあったことも、撰述の理
由としてあげられています。

撰述由来に引き続き、『普勸坐禅儀』のご提
唱に移りましたが、その前にご老師から、道

元禅師御真筆の『普勸坐禅儀撰述由来』と、
天福元年に書かれた『普勸坐禅儀』を写真に
撮り製本した影印版を、拝見させていただき
ました。因みに龍泉院の山門にかかっている
額の「天徳山」の文字は、天福本『普勸坐禅儀』
から天と徳と山を写したものであると、ご老
師からご紹介がありました。

『普勸坐禅儀』のご提唱は両日にわたって
二回行われ、第三炷目の夜坐の時と、最後の
第七炷目の時には、読誦いたしました。これ
までの一夜接心でも『普勸坐禅儀』を読誦し
ていましたが、今回はよく意味を理解しなが
らお唱えすることができたと、茶話会の時に
皆さん仰っていました。

一夜接心会に初参加しての感想

柏市 遠藤 昇

『明珠』編集委員の五十嵐さんから、初参
加者としての感想を書くように依頼されまし
たので、私なりに一夜接心会を振り返ってみ
たいと思います。

龍泉院の坐禅会で参禅させていただくよう
になつてから丁度三年が経ち、今年は何がな
んでも参加しようと思っておりましたので、
参加の申し込みは躊躇せずに応じましたが、

実は二つの課題がありました。

一つは、七炷の坐禅に耐えられるか。二つは、耳が不自由な為、皆さんにご迷惑をお掛けするのではないか、という課題です。初日の三炷、二日目の四炷の坐禅については、勤務のある日は就寝前、休日は朝・晩に、三〇分・四〇分の坐禅を、殆ど欠かさず組んでおりましたので、何とか成るだろうと考えておりましたが、後で述べますように大変でした。

初日は皆様方のお蔭により、何とか就寝迄にこぎつけることが出来ました。就寝前、全員が炊事場にて車座になり、坐禅談義や四方山話に耽っている中でも、典座の方は鍋から目を離さず、全員が床に就いてからも、炊事場に明かりが灯っておりまして。ともあれ初日は無事終了し、感謝の気持ちで床に就きました。

床に入ってから、明朝の不安がよぎりました。私の日常から、朝四時に起床する経験がめったに無く、又難聴の為、補聴器を付けていますが、就寝時には外さざるを得ず、皆様方にご迷惑をお掛けしてはとの思いから、なかなか寝付けませんでした。

不思議なもので、何時しか熟睡し、三時半ごろ目覚めた処、既に起床して居られる先達

の方々がおられました。このように、何時の間に整理したかと思う程、身支度を整え、寝具を整理し、静かに正座されておられる方、自らの役割を肅々と執り行方々が居られ、頭にガツンと衝撃を受けました。

私も気を引き締めて、第二日目の接心修行に臨みました。起床から朝食まで、日常に比べて間が在り、美味しい粥を沢山頂戴した所為か、三・四炷目の坐禅は厳しかった。特に四炷目の坐禅が厳しく、足が痛み出したので、『普勧坐禅儀』を誦する事に意識を集中し、もし跣坐が崩れる様ならば、其れは其れでやむを得ずと、覚悟を決めて耐えていたら、放禅鐘が鳴り響き、救われたと言うのが正直なところでした。

『普勧坐禅儀』のご教示に、「大安楽の法門」とありますが、私の坐禅はまだ未熟である事を、つくづくと思い知らされました。

その後、中食をいただき解散と成りましたが、何故か満足感に浸りながら、帰路をゆっくり運転している自分を感じておりました。

御老師・幹事・典座・ご参会の皆様方にお導きの御礼と感謝を申し上げ、一夜接心会初参加の感想とさせて頂きます。

一夜接心会を終えて

我孫子市 三浦 直

此の度はたまたま会社で休暇を取れましたので、六月六日のみ早朝四時半より参加させていただきました。最近、趣味と健康を兼ね、山登りを始めた私にとって、早起きはそれほど苦にはなりません。その日の坐禅は全部で四炷。坐禅すること自体が久々で、よほど坐禅することを渴望していたのか、足の痺れを強烈に感じることもなく、無事に終えることができました。

途中、朝・昼飯の美味に舌鼓を打ち、(食後の慣習には多少苦戦?) 本当にすばらしい体験をさせていただきまして、関係者の方々はただただ感謝する次第です。終盤は、少しの少し緊張感がほぐれたのか、ばててしまい、後片付けに積極的に参加できませんでした。申し訳ございませんでした。

定例参禅会も含め、もう少し多年層に渡る方々の参加が望まれるところではないでしょうか。昨今の経済危機からくる不安は、何も若年層ばかりでなく、私のような中年も含めた現役サラリーマンにも、暗い影を落としております。

今までは是としてきたものが非となる社会。年間自殺者は三万人という、どこかの国と戦争でもしているのではないかと思われるような異常な数字。徐々に拡がる貧富の格差、不景気といひながら、それでもダイエット本はよく売れるという特異な社会。

いっそのこと、文明の利器なぞ全て捨ててしまつて、もう一度鎖国でもしてしまつた方がよほど幸せなんじゃないか、車など無くてもただ歩けばいいだけの話。健康にだっていいし、地球様をこれ以上汚さずに済むし、四季の移ろいだつて実感できる。鎖国していた当時だつて、それで文明が著しく遅れた訳ではないようだし、立派な独自文化が花開いた訳だ。

幹事の小畑様からは、大変達筆な手紙を何回かいただきましたが、すぐに判読できない自分がそこにはいます。同じ日本人としてとても恥ずかしい限りです。これも日々コンピュータや新聞の文字しか見ていないことに起因しているのかもしれない。世の中が便利になればなるほど、逆に不幸せになり、どんなに無知になつてゐる気がしてならないのは、自分だけでしょいか？

たまには喧騒の世情を忘れ、不乱に坐禅を

する。静寂と緊張感の中で自分を見つめ直す。椎名老師の法話に熱く耳を傾ける。そこには、何か生きるヒントが隠されているやもしれません。一人でも多くの悩める方が、参禅して何かを会得して欲しいと思うのは、私だけでしょうか？ 先達の残してきた、この伝統的文化を誇りに思い、少しでも機会があれば、今後も積極的に参加するつもりです。

本当に貴重な体験をさせていただきました。椎名老師をはじめ関係者方々、ありがとうございました。ございました。重ねて感謝の意を申し上げます次第です。

龍泉院参禅会「四〇周年 記念行事準備委員会」活動報告(一)

書記 杉浦上太郎

昨秋実施した「良寛さんと出逢う旅」の際、椎名老師より、平成二三年は、参禅会発足四〇年となる。坐禅堂建立を含め記念行事を検討してはどうかとのご下問をいただきました。早速、小畑代表幹事を中心に準備委員会を編成いたし、すでに四回の準備委員会を開催いたしましたので、ご報告申し上げます。

「四〇周年記念行事準備委員会」委員

・顧問 椎名宏雄老師

- ・委員長 小畑節朗代表幹事
- ・副委員長 五十嵐嗣郎
- ・会計 刑部一郎
- ・書記 杉浦上太郎
- ・委員 中寫宏誠、添田昌弘、松井隆、加藤孝、相澤善彦、中村正市、小山斉、鈴木民雄、田上淳一

「四〇周年記念行事準備委員会」開催

- ・第一回…平成二二年二月二八日(一二名)
- ・第二回…同年三月一三日(一〇名)
- ・第三回…同年五月一六日(九名)
- ・第四回…同年七月一七日(九名)

「四〇周年記念行事決定事項」

一、「眼蔵会」

平成二三年五月一四日(土)～一五日(日)

二、「四〇周年記念講演」

平成二三年五月一五日(日)午後
講師／佐々木宏幹先生(ご承諾済)
演題／「仏教の力」―現代的意義―

三、「在家得度式」

平成二三年一月三日(木)文化の日
※右記の詳細は、後日別途ご案内の予定。

「坐禅堂建立の検討」

当会の会員が多士済々のお陰で、一級建築

士の加藤孝年番幹事、棟梁の中村正市さんを中心に専門的な判断を加えながら、多方面からの検討をいたしております。

これまで四回の会合で坐禅堂建立に関して色々検討されてきましたが、二・三ご紹介しますと、次のようなことがあげられます。

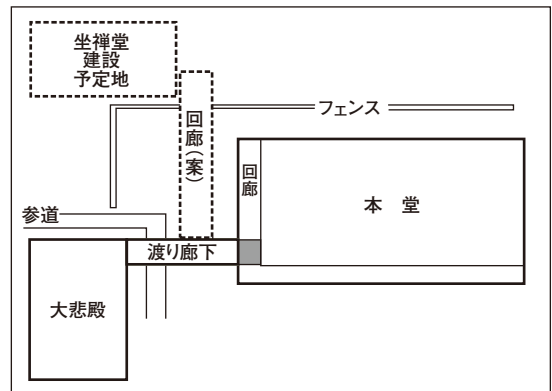
・当初、坐禅堂は、現在の本堂と同じ高さにし、本堂左手の濡れ縁または大悲殿渡り廊下から、回廊で結んで坐禅堂まで移動する案が出されました。しかし、回廊の長さを実測したところ、大悲殿渡り廊下からの場合、回廊の長さがおおよそ一八メートルになるので、回廊で結ぶことをやめる案も浮上してきました。

・単の数については、内単と外単を合わせて三五〜四〇ほどにする意見が、大勢を占めています。

・その他、坐禅堂にトイレを隣接させる案が具体的に検討されていきました。しかし坐禅堂を手づくりした他寺で、坐禅堂にトイレを隣接した結果、坐禅中にトイレの音が聞こえて坐禅に集中できないという失敗例の報告がありました。このため、トイレは離れた場所に設置することを再検討することにしました。

なお建設予定地は、本堂の左裏です（下図参照）。

坐禅堂建設予定地略図



写真とこころ（一）

取手市 三町 勲

「草の芽の小さき影や坐禅堂」

添田昌弘氏の句集『紙魚』の秀作である。写真家にとっては、とても遠近感のある俳句に、詠んだ途端に句集を持って飛び上った。これは俳句というより「写真のこころ」だと一瞬思ったからである。

いつか皆さんに写真の講釈をしたいと思っている矢先に、この一句が私の執筆の神経をくすぐったのである。添田禅友有難う。

■ 石仏写真で『写真のこころ』を悟る

私の写真の遍歴は、関伽流山（長野県佐久市）に始まります。石仏写真の草分けと云われる有名な井上清司先生との出会いであり、石仏写真の出会いでもあったのです。それから一〇数年石仏を撮り続けています。また、石仏写真を通して「写真のこころ」を掬い取ったのです。

毎年暮れの成道会の時に差し上げ、貰って戴く石仏写真は、その一年に撮った写真の一部です。勝手ながら有難いことです。

石仏はたまに苔むした魅力的なものもありますが、一様に通常灰色です。しかし、光を上手く呼び寄せたり、レンズの「絞り」や「露



あかる山千手観音

出」を微妙に調整することで、吃驚するような色調が創像出来ます。本当に光と影だけの墨絵のような雰囲気が出出来ることもあります。そこには達磨の端坐の様相さえ再現されます。有難いことです。

■ 石仏に仏の声を聴く芸術

井上清司先生は、昭和五十一年に長野の安曇野を訪れ、満面微笑みをたたえたお地藏さんとの出会いが、石仏写真との出会いであったと聞いています。しかし、その根源は、広島島の原爆の爆心地に近い実家にあった、マンマちゃんと呼び、毎朝拝んでいたお地藏さんが、潜在意識の中に刻み込まれていて、それが長い眠りから覚めたのです。

「石仏との出会いは一期一会」であり、「何十年何百年とひとり天空を支え続けてきた長い眠りから目覚めさせ、語りかけ、話し合うことから始まる」と、常に石仏撮影の前にわれわれを諭されます。

まさに、石仏写真は、仏の声を聞いて永久不滅の影像に掬い上げる芸術なのです。

写真と俳句は非常に共通点が多いと云われています。写真も俳句も無駄なものを徹底的に削りとった、「自然や事象の真髄だけを掬い」とる芸術である」からです。つまり、禪的

には、「本来の面目」を掬い上げると云えるのではないのでしょうか。

冒頭に紹介した添田さんの俳句の情景を、私の「写真のこころ」で撮るとしますと、

① レンズは広角を装着し、「草の芽の小さき影」にピントを合わせます。背景に小さく坐禅堂が写し込まれるでしょう。これをイメージするだけで体がぞくぞくしてきます。

② これを望遠レンズで撮ろうものなら、写真としては撮れますが、主題が明確でなくなります。イメージのない写真になってしまいます。

③ マクロレンズでは「草の芽の小さき影」がクローズアップして撮れますが、この俳句の大事な背景が消えてしまいます。

■ 写真には最初にイメージが大切

「草の芽の小さき影」が春を誘っている。その後ろから仏の優しい声が流れてくる。その五次元の世界が眼前に静かに広がってくるのです。こんなイメージを描きながらシャッターを切る気持ちは、それだけで仏の世界そのものではないでしょうか。有難いことです。

■ 石仏に生きる場所を見つけてあげる

自然にあるべき位置に置かれてるわけではありません。だから、撮る前に仏の位置を



大悲願寺石仏

決めてあげる必要があります。近づいてみたり、後ろにさがってみたり、角度を変えてみたり、撮るまでに試行錯誤が続きます。これが写真の醍醐味の一つでもあります。

やっと決めた仏の居場所「絞り」「露出」を選定します。しかし、前に述べたようにどう云うイメージかを再チェックして撮影条件を見直します。

そんな時、仏の声が聴こえることがあります。すると、また、見直しです。

■ 最初の坐禅は最初の坐仏

余り、捏ねくり回した写真はいい写真になりません。書道家が真白い半紙の上に、無心に描く筆に勝るものはないのと、似通っています。このころには、邪心がないからです。



真夏の詩（北海道）

もつといい写真にしようとか、この作品で金賞を取ろうとか我欲があると、良い作品になりません。

北海道に最初に撮影に行った時、あの大地と空に魅せられて無心に撮った写真が、純粹で一番いい作品になった記憶があります。

二度目に再度挑戦した時は、悲惨な気持ちになりました。二度目だから、初回よりいい写真を撮ろうと、こころに一抹の邪心が芽生えていたのです。それが透徹した眼力に狂いを生じさせていたのです。

三度目は、「最初の坐禅」の気持ちで北海道の大地と空にぶつかって行ったのです。本当に秀作が出来て、新院展で審査委員会特別賞を頂きました。有難いことです。

（次回に続く）

宝慶寺「大道会接心」に参加

柏市 松井 隆

九年前、宝慶寺に禅を学び、再び「大道会接心」の体験である。四月三〇日に上山するため、五十嵐さんと前日の朝、柏を車で発つて、その晩は高山市内に宿泊、翌日宝慶寺に向かった。国道一五八号沿いの山の色が、淡い緑に転々と色を添える山桜、宝慶寺への道すがらとして、鮮やかな風景を脳裏に刻む。大野盆地に入り、畦道の芝桜の濃い桃色が坐禅への誘いかと、自然の色に酔いつつ宝慶寺の山門に着く。

山門をくぐると、法事の帰りの田中真海老師とばったり鉢合わせ。「どこから参られたかな」、「柏市の龍泉院から」と応え、さらに永野先輩の名を告げると納得頂き、入門が叶う。永野氏は、今回が「大道会接心」一〇回目の参加で、作法、作務、食事にベテラン振りを発揮されて、輝いて見えた。

宝慶寺は、道元禅師を慕って中国から来朝された寂圓禅師により開基され、七〇〇年もの伝統を伝えてきた修行道場であり、荘厳な佇まいの中で、坐禅修行が叶うこと、真に嬉しいことである。

今回の修行で感じた事柄をいくつか以下に記してみたい。

一、朝課、晚課

お経の種類の多いことに驚くとともに、羅漢拝を唱えるのは、初めての体験である。これでもか、これでもかと五〇回程繰り返し、羅漢様への礼拝を行うのには驚くとともに、朝の体の鈍い動きを整えるのにも、大変に有益であった。

二、坐禅指導

坐禅指導は、思洋木玄直参しやうきげんの指導のもとに行われ、テキストが配られ、分かり易い指導を受けた。いつもの坐禅と異なると感じたのは、「欠気一息」と「左右揺身」についてである。

「欠気一息」は、口を大きく開き、肩を大きく釣り上げ、腰に力を入れて、腹式で深く呼吸するのである。この呼吸は、お腹の奥底から、顎を突き出してまでも息を吸い込み、そして力を抜いて、体を徐々に前へと倒しつ



宝慶寺の僧堂

つ、長くゆっくりと息を吐き出していくところにポイントがある。この吐き出すところに重きを置いて、深呼吸を数回繰り返した後、鼻息の呼吸に移り、正身端坐に導入していくのであるとの教えである。

もう一点の「左右揺身」は、背骨と背筋の下の方から刺激するように、体をねじり上げて、左に、また、右へと、意識を集中させて揺身を数回繰り返すことにより、背中から腰を鍛えるようにと強調されている。そのように準備をして坐禅に入ると、直ぐに深い鼻息とゆったりとした体形を保ち、安定した坐禅に入る

ことができるのだと受け止めた。正に、指導して頂いた思洋木玄直参の模範実践

には、その辺の迫力が満ち溢れていた。

三、食事

禅堂での食事は坐禅の延長にあつて、応量器を使用しての、厳粛な食事スタイルである。ご飯は玄米であるため、五〇回位噛んで十分に味わってほしいと、事前に指導を受ける。そうすることにより、消化にも良いとのこと、全くの驚きである。

赤い五段重ねの応量器、スプーン、へら、箸と布巾のセットを並べ、給仕を受ける。胡麻をスプーンで食す手法やへらの使い方など、僧堂で長い間に確立された作法により、このような食事文化が築きあげてられたものと、推測できる。

ご飯をいっぱい噛みしめて、各鉢の料理を十分に美味しく味わい、大変満足できた。この食事体験が、日頃の私どもの食事のあり方に、色々な示唆を与えてくれた。合掌

衣冠の盗と『菜根譚』の教え

我孫子市 清水 秀男

一、二〇一〇年七月三〇日付け朝日新聞【天声人語】に、先の参院選で当選した新議員は、七月の在任期間が六日しかないのにも拘わらず、歳費と文書通信交通滞在費を合

せて、満額二三〇万円が支払われることに関連して、中国の明代末の処世哲学清言集『菜根譚』の中から、「衣冠の盗」という言葉を用いし、給料泥棒に値する行為だと厳しく論説していた。

そこであらためて、引用された『菜根譚』で述べている該当の段を紐解いてみた。

書を読み聖賢を見ざれば、鉛槧の傭となる。

官に居て子民を愛せざれば、衣冠の盗となる。

学を講じて、躬行を尚ばざれば、口頭の禅となる。

業を立てて種徳を思わざれば、眼前の花となる。

《鉛槧の傭・・・文字の奴隷の意（鉛槧）は文字を書いたり塗抹したりするのに用いた鉛の粉と文字を記す板から、文筆・文字の意。『傭』はやとわれ者、奴隷）》

二、内容を味わう前に、『菜根譚』の著者洪自誠について一言述べておきたい。洪自誠は、内乱や政争が相次いで続発していた明代後半、その真つ只中で生きた儒者とされる。一説では、元官吏であり、政争に巻き込まれた挙句、争いに負けて隠遁し、その生活を楽

しんだ知識人とされている。

『菜根譚』は前集と後集に分かれ、各々の内容を見ると、前集が処世の道を、後集が隠遁閑居の楽しみを説いているように推測出来る。説かれている骨子は、儒教をベースに、仏教（特に禪）と道教が渾然一体となっており、儒・仏・道の三教に通じた博識の士と言える。

三、次に該当の段を、私なりに拙い意識を試みる。

「書物を読んでも書かれている聖人・賢人の真の心を味わうことが出来ないならば、字句を解釈したに過ぎず、文字の奴隷と化している。官吏の職に居ても、人民を常に思い、慈愛の心をもって接しないならば、役人の服装をした給与盗人と同じである。学問を講じても、自ら実践することを大切にしなければ、口先だけの禪と同じことになってしまう。事業を興しても、自分の目先だけの利益を追いかけて、長期的に、事業を通じて多くの人に恩恵を与える種をまかないならば、事業は目の前で咲いている花の様に、一時的なものになってしまう。」

これらから、この段は学問、政治、教育、経営等に関する基本的教訓を、簡にして要を得

た名文で明示していることが分かる。一つひとつみていくこととしたい。

一つは、書物を味読し、理解する際の心

文字面だけを見て、解釈しただけでは、真に理解したことにならない。何度も何度も味読し、時には声を出して読み、著者はじめ、聖賢人のほとばしる精神に、身心で迫ることが必要である。そして、『菜根譚』の別の段では、「心地乾浄けんじやうにして、方めて書を読み、古を学ぶべし（心の雑念を拭い洗い清めてから、あらためて書物を読み、古の聖賢の教えに学ぶべきである）」とも言っている。

これらを読み、私が禪に出会ってから何度も言われた次の言葉をあらためて噛み締めなおしている。

「『正法眼蔵』はじめ經典の言葉は、頭だけで理解出来ても本当に分かったとは言えない。心の雑念を鎮め、五官全体で読み、全身で咀嚼し、実参実究しなければ自分のものにならない」

二つは、官吏の職にある者の心得

政治家及び役人は、国家の将来を見据え、国民のために奉仕する公僕でなければならぬ。その原点を忘れ、既得権益にしがみつき、私利私欲に走り、国民にのみ負担を強いるな

らば、官衣をまとった俸禄泥棒に過ぎない。これはまさに中央・地方を問わず、今の日本の政治に巢食っている病状を言い当てた言葉である。国会議員歳費の日割りや天下り問題等は氷山の一角に過ぎない。政治家及び役人はもう一度、この基本的教えに虚心に立ち返り、慈悲心を以って国民のために奉仕する公僕であって欲しいと切に願っている。

三つは、学問を志し、講じる者の心得

学問を研究したり講じたりする者は、高邁な理論を構築し、説くだけでは片手落ちである。その理論を自ら、実行実践しなければ、禪を口先だけでもあそんでいる様なものだ。先達から口を酸っぱくして言われた言葉を今、思い出している。それは「行解相応ぎやうげさうおうに徹せよ」であった。行解相応とは仏道修行と理論的理解の両方が必要で、両面が相俟って仏道が完成する。簡単に言えば、学ぶことと、日々行っていることを一致させよということである。これは、まさに『菜根譚』で述べられていることであり、それに程遠い自分を深く反省している。

四つは、事業を営む者の心得

事業を営むものは、自分の目の前の短期的利益のみ追いかけてはいけない。事業の

理念と目標を明確にし、永続的發展のために種をまき、育てなければならぬ。その種は利益追求（自利）だけのためのみではなく、事業を通じて長期的に社会に貢献するため（利他）の恩恵の種でなければならず、かつ自利利他のバランスが肝要である。そうでなければ事業は一時的に咲くだけの、はかない徒花の様なものとなる。

この教えは、多くの企業経営者の任期が一二年の短期であり、保身のため目の前の利益追求のみに汲々として、将来の発展・永続のための種まき・育成を軽視しがちな経営者が多い現状を考える時、じっくり味わうべき箴言ではないかと思う。

以上、全ては各々の本質を良く見極め、実行するべしとのこれら『菜根譚』の教えは、まさに現代にもあてはまる永遠の真理であり、【天声人語】のお蔭で、私もあらためて『菜根譚』に触れ、学びなおし、猛省する機会に恵まれたことを感謝している。 以上

施食会に参加して

柏市 西村よしみ

参禅会後の茶話会で、幹事さんから「『セジキエ』のお手伝いをお願いします。」というお

話がありました。頭の中では、セジキエ？一体何だろう、セは施か、お施餓鬼と同じなのか、といういろいろ考えていましたが、最後まで漢字が浮かばずにいました。家に戻って調べ、曹洞宗では、お施餓鬼を施食会ということが分かりました。

実は、家のお寺さんから毎年送られてくるお施餓鬼の案内と、新しい卒塔婆を何本お願いするという葉書を送ったばかりでした。ですが、私はお施餓鬼というのが具体的に何をするのか全く知らずに、毎年新しくなった卒塔婆をただ見て、お参りをしていました。

このような私が、施食会のお手伝いに参加したのです。ベテランの美川さんの指導のもと、檀家の役員さんに冷たいお茶を配ったり、お弁当を並べたりして、どうにかこうにかお手伝いすることができました。

駐車場の整理、本堂の飾り付けなどを担当されている男性の方に比べると、台所での内向きの仕事は、冷房が入って涼しいし、仕事の合間には、参禅会のことや良寛さんへの旅、中国訪問などについて、美川さんからお聞きする時間もありませんでした。参禅会に参加したばかりの私には、とても貴重な時間を過ごすことができたと思います。

台所から本堂を眺めていると、参禅会とは違った風景がそこにありました。法要に参加される僧侶や檀家の方々、本堂の外に並べられた多くの卒塔婆、その卒塔婆を持つてお墓に向かう人。そして、この施食会という「場」において、初めて私は、私自身とお寺、それに仏教との関係について問い直しました。四〇年以上も前、「現成公案」を読む機会があり、その後いつか道元の世界に近づきたいと願っていた矢先に、龍泉院のHPと出会い、参禅会に参加する機会を得ることができました。

しかし、坐禅といっても、まだ「まねごと」に過ぎません。また家で、ご老師の提唱を思い出しながら『正法眼蔵』に向かい、歯が立たないながらも理解しようとしている私は、「知る」ことを目指して、「信じる」という行為からは、かけ離れているように思います。

ですが、今回施食会に参加し、その意味を問うた時、檀家の方々とお寺という結びつきが少し明らかになり、「寺」というものに私自身が近づいていったように感じました。



◆◆会員便り◆◆

八月一六日、今年一番の暑さの中で龍泉院施食会が開催されました。外は三六度を超える、うだるような暑さですが、本堂内は前日設置されたばかりのエアコンが効いていて、大変涼しく快適な施食会でした。参禅会有志が施食会に奉仕するようになってから一九年

経ち、本堂の飾り付け作業は、杉浦さんの指揮のもと、デジカメで作成した独自のマニュアルも参考にしながらスムーズに進みました。女性陣は、毎年お手伝いに参加されている美川さんともう一人、七月に参禅会に入会されたばかりの西村さんが加わってくださり、獅子奮迅の働きで、お台所を切り盛りされていました。

龍泉院参禅会簡介

〔定例参禅会〕

- ・日時 毎月第四日曜九時（初参加の方は八時半）
- ・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）
- ・講義 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』提唱
- ・座談 自己紹介・喫茶・座談、正午解散
- ・参加資格 年齢、性別など一切不問、初心者には懇切に指導
- ・会費 無料

〔年間行事〕

- ・一夜接心 本年は六月五・六日、七炷の坐禅と提唱等
 - ・成道会 本年は二月五日、坐禅・法要・問答・法話・点心等
 - ・他の行事 涅槃会（二月一三日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）手伝い、歳末煤払い（一二月例会後）
 - ・作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
 - ・刊行物 『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）、『口宣』（年一回）
- 【ウェブサイト <http://www.ryusein.org/>】『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます。

沼南雑誌

平成二二年活動記録

〔定例参禅会・年間行事〕

（一）内は座談の司会者

- 三月二八日 三五名
（逢坂 国一氏）
- 四月八日 九名
花祭り
- 四月二五日 三四名
（鈴木 民雄氏）
坐禅・提唱後、筥掘り
- 五月二三日 三〇名
（根本 保氏）
- 六月五・六日 一九名
一夜接心
幹事 小畑 節朗氏
加藤 孝氏
田上 淳一氏
- 六月二七日 三一名
（相澤 善彦氏）
- 七月二五日 三〇名
（中村 正市氏）
- 八月一六日 二九名
施食会作務奉仕一三名
法話 曹洞宗総合研究センター・宗学研究部門
研究員 栗谷良道老師
- 八月二二日 二九名
（中畠 宏誠氏）

〔奉仕作務〕

- 三月一九日（三名）
- 四月二日（四名）、一〇日（三名）、一六日（四名）
- 五月七日（三名）、八日（一名）、一四日（三名）
- 六月四日（三名）、一二日（三名）、一八日（三名）
- 七月二日（四名）、三日（一名）、一〇日（二名）、一六日（三名）
- 八月六日（四名）、一四日（二名）、二〇日（四名）

▼境内の掃除等の作務を始めて五月で一年過ぎました。この所の猛暑ですがに汗だく、一〇時半の冷たい梅割りお茶を頂戴し、ホッと一息です。現在は五〇〇株におよぶ紫陽花の剪定に挑戦中です。来年はお墓の横の竹藪の間伐に取り掛かりたいと思います。（隆道）

▼北原白秋の俳句に「蛸や山の施餓鬼の日盛ん」があり、施餓鬼会は暑い頃の行事であることが分かります。「施餓鬼」は、曹洞宗では施す者と施される者の間に尊卑貴賤の差があるとして、「施食会」と改めて称しているようです。

例年は施食会の後、涼しくなるのですが、今年は何時までも暑さが続いています。お互いに身体に気をつけましょう。（寛弘）